

静岡大情報学部（浜松市中区）は2017年度から、学生が学科の壁を超えて実習プロジェクトを企画できる選択科目「先端情報学実習」を取り入れた。4年次の卒業研究に入る前から、熱意ある学生の研究環境を整え、成長を後押しする。同学部によると、同様の取り組みは国内の大学では珍しいという。

（浜松総局・佐野由香利）



先端情報学実習の研究プロジェクトに取り組む学生
11月下旬、浜松市中区の静岡大浜松キャンパス

学生、主体的に実習企画

静大が新選択科目導入

17年度は全12プロジェクトで、半数近くは学生が提案した。実習は2〜4年次の前後期各2単位が付与され、4年次には研究内容を卒業研究として継続できる。2年生240人のうち52人が参加し、単位が出ない1年生も8人が学んでいる。

同学部は情報科学、情報社会学、行動情報学の3学科。各プロジェクトには、異なる学科に所属する2人以上の教員が参画し、学生は多角的な視点から助言を受ける。客観的評価による結果（アウトプット）も重要視。国内外の学術団体主催大会での発表や学術論文誌への掲載、自治体や地域コミュニティでの採用、採用事業への学生参加などを評価指標にする。

「見えない価値を測る」情報の経済価値分析プロジェクト」に取り組む情報科学科2年の勝見沙奈さん（19）は、所属と異なる情報社会学や統計学などの観点から分析している。勝見さんは「異なる学科のメンバーから、違う視点の意見が出て研究を深められるのが面白い」と話す。

学生からは他にも「やりたい研究を先取りできてうれしい」「長い期間、研究に取り組むことができ、自身の濃い成果が得られるかもしれない」など、好意的な声が上がると、実習全体を束ねる竹内勇剛情報科学科教授は「やりたいことを抱いて入学しても、卒業研究に取り組みころには熱意が冷めている学生を多く見てきた。意欲ある学生をしっかりと支援し、人材育成につなげたい」と期待する。

情報学研究 学科超えて

静岡新聞（夕刊）3頁
2017年8月3日（木）発行